

自閉症・情緒障害特別支援学級におけるタブレット端末を用いた自立活動の実践

－「情報活用型プロジェクト学習」の考え方をフレームとした授業実践－

井手尾美樹（熊本市立城北小学校）

概要：自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍する児童の中には、情報のインプット、アウトプット、整理、プランニングなどに困難さや偏りがある場合がある。自分事で楽しめる学習経験を通して「解決プロセス」を学ぶ機会を設定し、学び方の技能としての情報活用能力を身につけさせたい。本実践では、自立活動において、「夢プロジェクト 2020～20 歳の自分へメッセージを伝えよう～」という単元を設定し、課題解決の「見通し」をもたせるための手立てとして「情報活用型プロジェクト学習」を行った。自分発信の「問い」、動画づくりを中心にしたタブレット端末でのアウトプットは主体的な対話や考えの表出を促し、児童間の学び合いを深めた。

キーワード：自立活動、実行機能、情報活用能力、タブレット端末、情報活用型プロジェクト学習

1 はじめに

2020 年度から全面実施された学習指導要領には、「資質・能力の育成」「主体的・対話的で深い学び」などのキーワードが掲げられ（文部科学省, 2017）、その実現に向け、日々授業改善に臨んでいる。前文には「一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」と示されている。その中で、このコロナ禍のもとで急速な活用が進んだ、タブレット端末を用いた本質的な学びやその活用についても、さらなる実践が期待されている。

また、特別支援学級における「自立活動」は、一人一人のよさや可能性を認識し、高めていくための教育課程を編成できる、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養うことを目標とした教育領域である。特別支援学級に在籍する児童生徒の中には、「目標に向かって行動するために必要な考えや行動、感情をコントロールする機能」といわれている「実

行機能」に弱さのある児童生徒が大変多い。特に自閉症・情緒障害特別支援学級では、交流学級での授業及び当該学年に準ずる学習を中心に進めている児童生徒も多い。その中で、学んだことを新聞にまとめたり、グループで協働的にプレゼンを作成したりする探究学習を多く経験する。しかし、実行機能の弱さを含め、学び方のアンバランスさによって、うまく計画を立てられなかったり、何から取り掛かったらよいかわからなかったりして、学習への見通しがもてず意欲をなくしてしまうことや、「話し合い」というインプットアウトプットの活動についていわず、友達との対話的な学び合いに参加できず、自信をなくしてしまうこともある。

そこで、本実践では、稲垣忠氏が提案する「情報活用型プロジェクト学習」を参考に、友達と協働しながら学習を深めたり、学び方を身につけながら学習を進めたりすることをねらいとした実践を行った。また、タブレットでのアウトプットを軸に、子どもたち同士が主体的に対話的にかかわりあう場面を作り出せるような授業を目指したい。

2 実践の概要

(1) 本学級の児童

本実践は、自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍する児童及び肢体不自由特別支援学級に在籍する児童、計 11 人に対して行った。2 年生から 6 年生まで幅広く在籍し、学年にはばらつきがある。しかし、6 年生は卒業式、4 年生は二分の一人式、2 年生は生活科「あしたへジャンプ」、などの自分と向き合う行事や学習が控えている。これらの学びを、子どもたちにとって最大限、自分をよりよく知ったり、自分の課題について見つめ直したりする機会にしたいと考えた。

個人の学び方の実態については、学年差による発達の個人差や個の特性的な多様さがある。全体的に何か目標に向かって段取りを計画したり、コミュニケーションの観点から、友達との学び合いがうまくいかなかったりする児童もいる。

(2) 単元の設定

上記の実態をもとに、「夢プロジェクト 2020～20 歳の自分へメッセージを伝えよう～」という単元を設定した(表 1)。

本単元では、柱 1：個別の目標を踏まえた「自

表 1 単元計画

	学習過程	学習活動	
1	今の自分を見つめる。	自分がどんなことにワクワクするのか、自分のこれからについて「知りたいこと」や「ナゾ」を挙げる。	課題づくり
2	見通しをもつ。	どんなことをしらべるか、どんな動画を作りたいか、そのためにどんなことをしたらいいか等をまとめる(課題解決シート)	
3	情報を集める。	動画や新聞にまとめるための材料を集める。(一つ一つの動画を撮る、情報を集める)	収集
4	くっつける、わかりやすくする。	調べたことや動画をつなぎ合わせて、一つの作品にする。お互いに友達と見せ合っ、アドバイスし合い、よりわかりやすく楽しいものにする。	編集
5	20歳の自分へメッセージを考える。	作った成果物を学級で見合い、自分の振り返りや友達の感想をもとに、20歳の自分へメッセージを送る。	
6	発表する。	啓発授業で交流学級の友達に、授業参観で保護者に成果物を披露する。	発信
7	ふりかえり・発展	これからの生活や学習に生かす。	評価

己の実現」の観点、柱 2：学習を進める上での学び方の獲得、気づき(プランニング)、柱 3：他者との学び合い、の 3 点を柱とし、単元構成の軸とした。また、この学習が、自分自身について、よりよく知る機会となり、「頑張れた！」という達成感やこれからの自分に期待しながら成長する力、学習の進め方や学び方への気づきなどを獲得できるように工夫した。

3 方法 ～取組の視点～

(1) 目的意識をもって学習に取り組むための工夫

①課題づくりの工夫

単元設定における柱 1 と関連し、将来の自立に向けて、子どもたち一人一人が自分の「いま」を見つめることから学習をスタートした。高学年では、より具体的な進路である「職業」へや「進路」についての悩みなどを心の中に不安として持っている児童もいる。また、低学年では、「心がわくわくすること」をまとめることで、リラックスの方法に気づき、そのわくわくが、自己肯定感を高め、自己実現に繋がったりするイメージを持つことができると考えた。そのため、達成感を味わえるよう、新聞や動画などの成果物を残せるようにした。それを、目的意識を持たせるため「ミッション」にすることで、低学年では、その活動自体にわくわくできることも重視した。高学年では、作ることそのもののわくわく感だけでなく、自分の課題解決につながるものが、意欲につながるようにした。

導入では、卒業式や二分の一人式などを意識させたいうえで、「夢は何か」「夢に向けて、知りたいこと、モヤモヤしていることは何か」の 2 つの質問をすることからスタートした。課題意識を持ったところで、「夢プロジェクト 2020～20 歳の自分へメッセージを伝えよう」というミッションを提示し、一人一人の問いを深め、目的意識を高めた。

②伝える相手の設定

発信する相手を決めることで、見る人のこと

を考えることができるよう工夫した。人に発信することに苦手さを感じる児童もいるので、「二十歳の自分へ」というサブタイトルは、「将来を意識した今」という側面だけではなく、「自分へのメッセージ」という客観的な相手としての自分を設定するという役割も持たせた。そうすることで、相手意識のある作品になるよう工夫した。

(2) 必要に応じて、他者と対話をしながら自分の考えを広げることができるようにするための工夫

単元設定における柱2と関連し、話し合い活動の工夫・改善を図った。

① やってみたいことを出し合う。

「夢プロ」でやってみたいことを全員で考えた。アイデアが浮かばない児童も、他児のアイデアをヒントにしながら、「それいいな」「自分もやってみたいな」という意欲をもったり、イメージを共有したりできるようにした。

② 定期的な相互評価

「やってみたいこと」を出し合ったあと、課題同士の共通点や児童同士の関係性をもとに、ペアを組んだ。スタートしてすぐに、お互い相談したり、動画を撮り合ったりするパートナーを作ることで、対話しながら作品作りを進められるようにした。

(3) 深い学びを生み出すための振り返りの工夫

学習を通して、振り返りシートを活用した。実際の作品作りに入ってから、ルーブリック(評価基準表)を用い、何がどうだったか、どんな自己評価をするかを示した。

(4) 情報活用能力を育成するための工夫

主に、学び方に関する側面から、児童の実行機能に焦点をあてた。新学習指導要領では「学習の基盤となる資質・能力」として、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力が例示されている。稲垣忠(2020)は、情報活用能力を「課題を設定し、情報を収集し、集めた情報を整理・分析し、知見をまとめ・表現する一連の探求プロセスを支える力」と述べている。自立活動において、「学習の基盤となる資質・能力」を育て

ることやICT活用の側面だけでない「情報活用能力」を意識した単元構成は、子どもたちの実態を踏まえ、学習を支えていく教師にとって、重要な視点である。子どもたちにとって、学習過程そのものが、ゴールに向かって学習を進める際の枠組みになるような活動とした(図1)

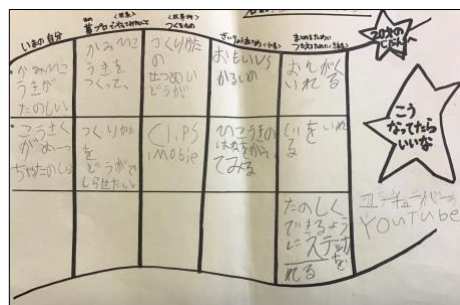


図1 児童が考えた学習計画

具体的には、「情報活用型プロジェクト学習」を参考に、「自分が今わくわくすること」「これからへのモヤモヤ」を起点として、問いや学習課題を立て、課題解決のために、課題発見、収集、編集、発信という過程に分けた行動計画を立てた。

4 結果<成果と課題>

(1) 目的意識をもって学習に取り組むための工夫

自分がやってみたいことを起点としたことで、成果物を作る活動に楽しんで取り組むことができた。一方、どのような活動をするかいいのかわかるまでは、言葉ばかりの説明になり、学習意欲が低下した。「やってみたいこと」を共有するだけでは具体的な案が出にくかったので、児童が熱中している活動をビデオに録り、「YouTuberになりたい」という夢を引き合いに出した。ある児童がYouTuberになりきってビデオ撮影したものを子どもたちに提示し、具体的な動画を見せることで、「作り方を説明してくれるから作ってみたい!」「ここで動画が止まってほしい!」など、編集への視点も持ちながらつぶやき、課題づくりのきっかけとなった。

(2) 必要に応じて、他者と対話をしながら自分の考えを広げることができるようにするための工夫

最も有効で、児童にとって必然的な対話となったのは、実際に作ったものをお互いに見合うという相互評価の場であった。また、全体で共有する場面を設定したことも大きな成果だった。「テロップを入れて作ってみたい!」「どうやったらそういう風に作れる?」「こうしたらいいよ」と、自然な対話が児童同士で見られた。具体的な情報をもとにした友達からのフィードバックやアドバイスを受けることで、活動自体に広がりが出て、楽しさが広がった。こうした活動の中で、アプリケーションの具体的な使い方も互いに学び合う機会となった。相互鑑賞は、見る側の視点を体験することができるため、作品を客観的に見ることもつながり、相手意識を高めることができた。

(3) 深い学びを生み出すための振り返りの工夫

ある児童は、活動に見通しを立てる段階では、振り返りシートに「今日は話し合いはなかった」と、評価に困ることがあった。そこで、「収集」段階から評価基準であるループリックを用いた。多くの児童が、振り返りの時間に自分の今日の学びは何だったか行動を振り返り、意味付けしたり次にすることを考えたりすることができた(図2)。

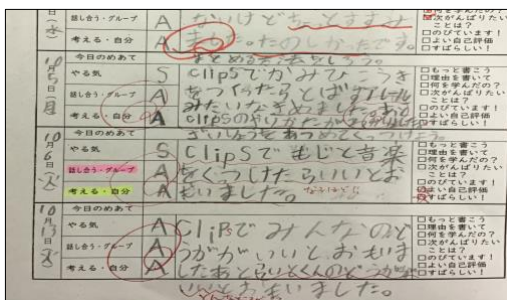


図2 振り返りシート

(4) 情報活用能力を育成するための工夫

多くの児童が、製作そのものに主体的に取り組んだ。課題解決シートやループリックが、思考を補助する役割を果たした。学習を進める中で、作業工程を確認するために課題解決シートを常に机において取り組む児童もいた。しかし、

特に新聞づくりでは、課題解決シートだけでは不十分な児童もいた。調べたことを読み取ったり、情報を分類したりする「探究スキル」への手立てについて再考する必要がある。

5 考察

- ・児童がアウトプットしたものを通した対話
- ・思考過程を支える課題解決シートの有効性
- ・学習の終わりに、今日できたことに価値づけしたり次への見通しを立てたりする振り返り以上が今回の成果であったと捉える。

「次に何をすればよいのか」と「まとめる中身」を頭の中だけでストックしておくことは、教師が思っている以上に負荷があることもわかった。一方で、この学習では、実行機能に弱さのある児童が、学習を進める際の苦手さと直面することもある。そのため教師は、何を補い、何を学ばせるのかを、吟味する必要がある。学習過程そのものを、今後の教科学習などで使える枠組みとして、児童一人一人の学び方と向き合うため活用していきたい。

参考文献

小学校学習指導要領(平成29年告示)
 稲垣忠(2020) 探究する学びをデザインする! 情報活用型プロジェクト学習. 明治図書
 高山恵子(2019) やる気スイッチをON! 実行機能をアップする37のワーク. 合同出版
 伊藤崇達(2009) 自己調整学習の成立過程 学習方略と動機づけの役割. 北大路書房
 干川隆・肥後祥治(2000) パートナーシップの原動力としての夢:カナダにおけるMAPSとPATHの紹介. 障害児教育分野における協力・連携の形成に関する調査研究. 国立特殊教育総合研究所研究成果報告書, 44 - 50